

ボグダーノフのイデオロギー論における「下部構造 －上部構造」図式の克服

佐藤, 正則
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4773110>

出版情報 : 言語文化論究. 48, pp.49-58, 2022-03-17. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

ボグダーノフのイデオロギー論における 「下部構造－上部構造」図式の克服

佐藤正則

はじめに

ロシアのマルクス主義理論家アレクサンドル・ボグダーノフ（本姓マリノフスキー、1873–1928年）は、ボリシェヴィキの指導者であるとともに、哲学、経済学、プロレタリア文化理論、さらには医学研究など多岐にわたる領域で独創的な知的活動を展開したことで知られている。ボグダーノフの社会理論の中でもっとも重要な部分を占めるのはイデオロギー論である。ボグダーノフは、イデオロギーの起源や発展のメカニズムとプロセス、社会における役割や機能といった問題について、1910年代初めごろまでに、当時としてはかなり独創的な見解を展開するにいたった。さらに、それをふまえてブルジョワ社会のイデオロギーを「フェティシズム」として批判するとともに、未来の集団主義社会を実現するためには権力の奪取だけでは十全ではないと主張し、文化面での変革、すなわち新しいイデオロギーを創造する必要性を訴えた。その構想は十月革命後にプロレタリア文化の創出を目的とする「プロレトクリト」の運動に結実した。

しかし、ボグダーノフのイデオロギー論は、彼の哲学「経験一元論」や統一科学「テクトロギヤ」と同じように、いやそれ以上に、今日にいたるまで無視され忘れられたままである。ボグダーノフのイデオロギー論は、かつてのソ連の公式哲学では「観念論」、「俗流社会学」として否定されていた。そればかりでなく西側の非共産圏においても、イデオロギー一般をめぐる議論においてはむしろ、マルクス主義とイデオロギーとの関係が論じられる際ですら、ボグダーノフのイデオロギー論が俎上にあげられることはほとんどなかった。ボグダーノフの研究者においても、多くの場合、ボグダーノフのイデオロギー論は、彼のプロレタリア文化論の理論的前提として触れられるにすぎない。ボグダーノフのイデオロギー論そのものが主題としてとりあげられることは少ない。

ボグダーノフが自身のイデオロギー論を体系化させていくのは1900年代初頭から1910年代前半にかけてである。当時はまだマルクス-エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』（1845–46年執筆）は公刊されておらず、ボグダーノフが参照することができたのは『『経済学批判』序言』（1859年）などにとどまる。ボグダーノフは、マルクスから離れて、独自のイデオロギー論を構築しようとしたと言ってよい。したがって、ボグダーノフのイデオロギー論とマルクス-エンゲルスの記述との差異を、マルクスの歪曲とみなして批判することにはあまり意味はない。

ボグダーノフのイデオロギー論の特徴は、イデオロギーが社会を組織化する機能を肯定的に評価し重視する点にある。そのため、彼はイデオロギーを虚偽意識とは定義しない。また、ボグダーノフの主張では、イデオロギーの社会的機能は権力による支配にはとどまらない。一見したところでは、ボグダーノフのイデオロギー論は、下部構造（経済的土台）が上部構造（イデオロギー）を規

定するという決定論的公式にたいして、上部構造が下部構造におよぼす反作用に目を向けるものであり、この点では後の西欧マルクス主義者の多くに共通する特徴を持つように見える。しかし、ボグダーノフの構想は、上部構造の役割を強調するにとどまらず、マルクス主義イデオロギー論の基本的枠組みである「下部構造－上部構造」図式そのものの再検討にまでおよんでいる。

本稿では、ボグダーノフがイデオロギーをめぐる議論にどのような新たな独創的な知見をもたらしつつあったのか、それがどのような可能性をはらむものであったのかを検討する。とりわけ、マルクス主義の古典的な「下部構造－上部構造」図式を、ボグダーノフがいかに批判し、克服しようとしていたのかという点に眼を向けたい。

イデオロギーと社会的意識

ボグダーノフのイデオロギー論において、まずもって注目されることは、この概念の定義の広さである。ボグダーノフは、著書『社会意識学』（1914年）の冒頭で、イデオロギーを「社会的意識」、さらに「精神文化」と呼び変え、「表現され理解されたすべてのもの、ある人から他の人々へと相互に知られるようになったすべてのもの、これらはすべてそのことによって既に彼らにとって共通のものであり、もはや個人的な意識のみに属するものではなく、社会的意識に属する」と述べている。¹ この定義に従えば、複数の人々に共有されるようになった意識はどのようなものであれ、すべてイデオロギーとみなされることになる。実際、この著書では、イデオロギーの形態として、言語、思考、知識、慣習的規範、道徳、法律、科学、経済学や政治学、宗教、歌や文学といった芸術、さらには真理や虚偽、世界観の総体までもがとりあげられている。これは人間の精神活動のほぼすべてと言ってよい。一見したところ、この定義はあまりにも多くの対象を含みすぎており、社会的現象を分析、説明するための術語としては有効性に欠けるように思われる。事実、見田宗介は、ボグダーノフのイデオロギー定義を、「社会意識」と「イデオロギー」の概念としての区別と統一の弁証法をつかんでいない「無内容な解答」であると切り捨てている。²

もっとも、ボグダーノフによるイデオロギーの定義の広さをたんなる理論的な欠陥として片づけるのは早計である。ボグダーノフが人間の精神活動のすべてをイデオロギーの名の下に包括したことには積極的な理由がある。第1に、ボグダーノフは人間の精神活動のすべてを社会的に形成されたものとみなしている。第2に、ボグダーノフは人間の精神活動のすべてに社会的な組織化機能があると考えている。³

とはいえ、たしかに、このボグダーノフのイデオロギー定義を通常のマルクス主義の「下部構造－上部構造」の図式にあてはめようとする、理論的な不整合が生じてしまう。ボグダーノフの定義では、人間の精神活動のほぼすべてが上部構造とみなされるのだが、実際には、下部構造と考えられる生産と労働は目的的かつ社会的なものであり、したがって下部構造にも人間の意識や思考、人々間の社会的コミュニケーションが含まれるはずだと考えられるからである。実際、現代の多くのマルクス研究者は、イデオロギーを人間の意識・精神活動の一部分にすぎないものとみなしている。彼らの解釈では、マルクスの理論において上部構造（イデオロギー）に該当するのは、下部構造である生産から離れて「相対的に自立した」観念体系のみである。マルクス研究者たちは、下部構造とその変革に密接に関わるとみなされる経済的意識や社会生活さらには階級意識ですら上部構造ではなく下部構造に含まれると主張し、あらゆる意識をイデオロギーに含めるマルクスより後の潮流を戒める。

これについて、わが国では古くは櫛田民蔵や河上肇の議論がある。マルクスは『『経済学批判』序言』において、「法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー諸形態」と述べている。この記述について、櫛田民蔵は論文「社会主義は闇に面するか光に面するか」（1924年）において、「マルクスは一々の意識形態を列記しながら、何の理由で経済思想だけを数えないのであろうか」との疑念を呈している。これを受けて、河上肇は論文「マルクスの謂ゆる社会的意識形態について」（1926年）で、社会的意識形態のあるもの、すなわち経済的意識形態は、「現実の土台たる社会の経済的構造と分離し得べからざる連絡を有つ」のであり、「土台の中に織り込まれている」、と述べている。⁴

近年では、たとえば山之内靖が、マルクスに見られる「イデオロギー諸形態」と「社会的意識形態」とを区別し、「社会的意識諸形態なるものは、通説的に理解されるように法律的・政治的諸制度とならんでいわゆる上部構造を形成するものではなく、本質的には経済的土台のうちに内包されたところの、あるいは経済的諸関係の網の目に生活する諸個人の活動的存在と直接的に連繫をもつところの、日常的意識態様にほかならない」と論じている。さらに渡辺憲正も、マルクスにおいては経済的意識や階級意識も上部構造ではないと主張している。ボグダーノフのイデオロギー定義にたいする見田の批判も、こうした論点を背景にしていると推測される。⁵

じつはボグダーノフも、初期の論文「自然と社会における生の発展」（1902年）（後に論文集『社会心理学より』1904年に所収）において、下部構造である生産と労働の過程に意識が含まれることを指摘している。ボグダーノフは、「自らの生存闘争において、人々は意識を用いる以外のやりかたでは団結することができない。意識がなければ交流はない。したがって、社会生活はそのすべての現れにおいて意識的－心理的なものである。〔中略〕総じて、社会性は意識性と不可分である。社会的存在と社会的意識とは、この言葉の正確な意味において、同一のものである」と述べている。⁶ その際、ボグダーノフは、新カント派観念論者たちの論集『観念論の諸問題』（1902年）におけるE・トルベツコイの史的唯物論批判をとりあげている。トルベツコイは、人々の社会生活においては「経済的要因」ばかりでなく「心理的」要因も意味を持つとの主張にもとづいて、マルクスの史的唯物論を批判していた。これにたいしてボグダーノフは、トルベツコイは「経済」を完全に非心理なもののみならず誤っていると批判する。その際、ボグダーノフは、「しかしながら、「経済」とは人々の労働関係であって、身体の物理的関係ではない。人々は心理的な生きものであり、労働は意識的－合目的的活動である。〔中略〕イデオロギーとは、後に見るように、社会的経験を組織化する諸概念の形式、つまり社会心理学のある部分的領域であり、「経済」は同じ社会心理学の別の領域である」と述べている。⁷

一見すると、ボグダーノフが後の著書『社会意識学』で人間の意識のすべてをイデオロギーに含めていることは、ボグダーノフが以前の見解を翻し、自身がかつて「観念論」として批判した立場へと移行したかに映る。レーニンが著書『唯物論と経験批判論』（1909年）で、「社会的存在と社会的意識とは、この言葉の正確な意味において、同一のものである」とのボグダーノフの記述をとりあげ、「観念論の精神での、これらの唯物論的基礎の明らかな歪曲」であると論難している。これにたいして、レーニンは、社会的意識を社会的存在の「近似的」な反映とする立場を表明している。⁸

しかし、こうした見方は皮相であろう。むしろ上記の記述は、ボグダーノフが、イデオロギーを下部構造から離れた上部構造とみなす既存の理解をしりぞけ、イデオロギーを下部構造と不可分に結合したものとしてとらえなおそうとしていることを示唆している。実際、山之内靖は、このボグダーノフの主張について、「経済的土台構造のうちに活動する人間が同時に一定の歴史的・社会的意

識の所有者であるという点に着目しつつ、「序言」〔マルクス『『経済学批判』序言』——引用者〕の全面的再解釈を目指そうとしたものである」と好意的に評価している。ただし、残念ながら、山之内はボグダーノフのこの主張について、イデオロギー論と関連付けてこれ以上議論を進めることはしていない。⁹

「下部構造－上部構造」図式の批判とその克服

ボグダーノフは、既に論文「自然と社会における生の発展」において、マルクスの『『経済学批判』序言』から下部構造と上部構造にかんするくだりを引用して、以下のように批判している。

史的・一元論の古い定式は、その基礎においては、正しくなくなっているもの、もはや我々を十分に満足させるものではない。そこにはある不完全さを見いだすことができる。それは、社会的現象の広大な領域全体の直接的な生活上の意味がどこにあるのかを我々に説明しないし、なぜイデオロギーが社会に必要であるのか、何のためにイデオロギーは社会に役立つのか、どの程度それが必要なのかを明らかにしない。¹⁰

この論文でボグダーノフは、「下部構造－上部構造」図式に一応は従いながらも、随所でそれに独自の視点から改良を加えようとしている。イデオロギーの役割を強調するのみならず、「下部構造」である「生産力」という概念にたいしても、「生産の物的手段も生産者の心理的適応も包摂する」不正確なもののみならず、異議を唱えている。著書『現代の文化的課題』（1911年）でも、ボグダーノフは、「下部構造－上部構造」についてのマルクスの公式にたいして、同様の不満を表明している。¹¹

著書『社会意識学』では、ボグダーノフは、社会においてイデオロギーがはたす機能の重要性をさらに強調するようになる。ボグダーノフは、屋根がなければ家もありえないと述べ、イデオロギーは社会的労働と経済の屋根であり、イデオロギーなくしては社会的労働と経済は存在できない、と力説している。しかし、それにとどまらずさらに続けて、ボグダーノフは、上部構造という「この比喩は、とはいえ、まだ不充分であり不正確である」と述べ、「イデオロギーを有機体の脳にたとえるほうがより近い」と主張している。脳の発達には他の諸器官の発達によって決定されるが、脳は他の諸器官にとって不可欠なものである。¹² したがって、ここでは、下部構造が上部構造を規定しているのではない。むしろ、上部構造とされているイデオロギーが社会の成立と発展において決定的な役割をはたしている。そして、この著書では、またこれ以降の著作でも、ボグダーノフは「下部構造」、「上部構造」という用語をほとんど用いていない。

ボグダーノフは著書『社会意識学』の序文で、イデオロギーを「精神文化」とも呼びかえている。その際、ボグダーノフは「文化」を「人類を自然の上へと高めるような人間の努力のすべての結果、生活をより完全なものにする労働と思考のすべての成果」と定義づけている。そして文化を「物質文化」と「精神文化」に大別している。「物質文化」は「その技術的・経済的諸関係を伴う生産の全領域、外的自然に向けられる社会的労働、そのすべての手段と形式」であり、他方、「精神文化」すなわち「イデオロギー」は「自然との直接的な闘争の外部にあるすべての領域」であると説明されている。つまり、「精神文化」すなわち「イデオロギー」は、自然との闘争におけるより間接的な領域と位置づけられる。これは著書『現代の文化的課題』で提起した定義をほぼそのままくりかえしたものである。¹³ しかし、この二分法と「下部構造－上部構造」図式との関係は明示的には説明されて

いない。そのためボグダーノフの言う「物質文化」が下部構造と同一のものを指しているのか否かは判然としない。

より注目すべきこととして、この著書において、ボグダーノフは「生産すなわち社会的労働」を「技術的プロセス」と「経済的プロセス」という2つの「側面」に分けている。「技術的プロセス」は人間と外的自然との直接的な関係であり、「労働の対象、生産の材料と道具にたいする人間の作用そのもの」である。これにたいし、「経済的プロセス」は人々の間の相互関係をさしてあり、人々が「協働したり、自分たちの間で仕事を分けあったり、労働の場を配分したりする」ことである。その際、ボグダーノフは、「社会の発展は、社会が自然との生存闘争の中で周囲の環境すなわち外的自然に適應することによって規定されている」ことを前提として、社会と自然との闘争が「直接的に」おこなわれるのが技術的プロセスであり、経済は技術よりも間接的、イデオロギーは経済よりもさらに間接的な領域である、と説明している。¹⁴

これまでのマルクス主義においては、社会のプロセスは下部構造と上部構造との二分法で説明されてきた。しかし、ボグダーノフは、これに代えて、技術、経済、イデオロギーの三分法を導入し、それらの関係を自然との闘争における直接的領域と間接的領域としてとらえなおそうとしている。著書『社会意識学』では、ボグダーノフは、「社会の経済は、その発展において、その技術によって規定される。イデオロギーは、その発展において、経済および技術によって規定される」としながらも、「イデオロギーもまた自然との闘争にとって役立つ。これもまた適應である」と述べている。¹⁵

この三分法は、十月革命後の論文「芸術遺産について」（1918年）でも、以下のように、くりかえされている。

社会的プロセスは3つの「局面」に分けられる、あるいは、おそらくより正確に言えば、3つの側面を持っている。つまり、技術的、経済的、イデオロギー的である。技術的な側面においては、社会は自然と闘い、それを服従させる。つまり自分の生と発展のために外的世界を組織化する。経済的な側面——人々間の協働と分配の関係——においては、自然とのこの闘争のために、社会自体が組織化される。イデオロギー的な側面においては、社会は自己の経験、自己の体験を組織化し、そこから自己の生と発展すべてのための組織化の道具をつくり出す。したがって、技術、経済、精神文化の領域におけるすべての課題は組織化の課題であり、そのうえ、それは社会的な課題である。¹⁶

ここでは、技術・経済・イデオロギー（精神文化）は、組織化という普遍的な社会的プロセスの3つの「局面」、「側面」であって、それぞれがたがいに密接に関連している。また、いずれかがいずれかを規定しているわけでもない。既に初期の論文「自然と社会における生の発展」において、ボグダーノフは、社会的適應の2つの大きなグループとして「技術」と「イデオロギー」をあげた際、「双方の労働プロセスは、抽象においてすら分けることすら困難であるほど、密接に結びつくこともありえる」、と述べていた。さらには、著書『経済学小教程』の1919年の大改訂以降の版でも、経済現象は法律的現象および観念的現象と不可分の連関にあると明記されている。¹⁷

このように、ボグダーノフは、イデオロギーを下部構造から遊離した上部構造とみなす「下部構造－上部構造」図式をしりぞけ、「技術」、「経済」、「イデオロギー」を、「組織化」という普遍的な社会的プロセスの「局面」、「側面」として、たがいに不可分に結びついたものとしてとらえなおそうとしている。

後にフランスのマルクス主義哲学者ルイ・アルチュセールは、未完に終わった著書『生産諸関係の再生産』（1969-70年執筆）において、下部構造と上部構造という「比喻を乗り越える」必要性を訴え、「〈上部構造〉と〈下部構造〉とのあいだの、一般的でも曖昧でもないきわめて厳密な結び付きが、なによりまず国家のイデオロギー諸装置によって作り出されている」と主張している。また著書『マルクスのために』（1965年）で、アルチュセールは、全体性としての人間社会を構成する3つの審級として経済、政治、イデオロギーをあげ、イデオロギーを「あらゆる社会的全体性の有機的な一部分」とみなしている。こうした点について、今村仁司は、アルチュセールにおけるイデオロギーはたんなる「上部構造」ではないばかりか、「アルチュセールによれば、イデオロギーは下部構造ですらなく、いわば下部構造の下部構造とすらいえるのである。イデオロギーなしには、どんな過程も動かない」とまで言い切っている。¹⁸ ボグダーノフのイデオロギー論は、アルチュセールに近い論点をはらんでいた可能性がある。

技術的、経済的、イデオロギーを「組織化」という全体的な社会的プロセスの「局面」、「側面」とみなすボグダーノフの視座は、統一科学「テクトロギヤ」に結実することになる。しかし他面では、「テクトロギヤ」に包摂してしまったため、ボグダーノフはイデオロギーについての考察をそれ以上深めることができなかつたとも言える。

イデオロギーの多元性と重層性

イデオロギーを生産から自立した上部構造とみなすのではなく、「技術」、「経済」、「イデオロギー」の密接な相互関係の総体を普遍的な社会プロセスの全体ととらえるボグダーノフの構想は、イデオロギーの多元性と重層性、またその変動のプロセスの複雑性という彼の考えかたにも表れている。ボグダーノフは著書『社会意識学』において、時代ごとの支配的イデオロギーによって、人類の歴史を、1. 原始的イデオロギーの時代、2. 権威的イデオロギーの時代、3. 個人主義的イデオロギーの時代、4. 集団主義イデオロギーの時代、の4つに大別している。こうした大枠のみを見てしまうと、時代ごとに異なる思考様式が社会を支配してきたという単純な図式であると解されてしまいかねない。実際、マザーエフはソ連時代に、1920年代の生産主義芸術理論とボグダーノフの思想とを結びつけて論じ、両者を共に芸術を下部構造の直接的な反映として説明する「俗流社会学」とみなして批判していた。¹⁹ しかし、実際には、ボグダーノフは、それぞれの時代において単一のイデオロギーが存在したとは考えておらず、むしろイデオロギーが多元的かつ重層的な構造を持つことをくりかえし強調している。

まず、ボグダーノフは、とりわけ階級的に分化した社会においては、イデオロギーが単一であるとは考えない。むしろ、一つの社会において複数のイデオロギーが混在し闘争しあっている点を強調する。複数の階級に分裂している社会においては、階級ごとに異なるイデオロギーが生じる。そればかりか、同一の階級の内部ですら、生活条件の異なる集団の間では、異なるイデオロギーが生じることがありうる。たとえば、農村の手工業者と都会の手工業者は、また同じ資本家階級であっても工場主と銀行家は、同一のイデオロギーの持ち主とは言えない、とボグダーノフは言う。イデオロギーが異なるのは、異なる時代、別の社会集団においては、「生産ないし生産の周囲における人々の状態の違いに応じて、彼らの生の条件、彼らの利益、志向、周囲の世界にたいする彼らの視点も異なる。こうしたことすべてから、当然のことながら、異なる表現が見いだされ、異なる理解の方法が生みだされる」からである。²⁰

また、ボグダーノフは、イデオロギーを経済的土台の単純な反映とはみなしていない。ボグダーノフは、イデオロギー形態の発展の原因が「直接的に」生産の中に求められるという考えをまったくの誤りとして否定している。

あるイデオロギー的現象の原因が、他のイデオロギー的現象の中に存在することもある。たとえば、ある観念が発生するのはしばしば、それが他の、以前に形成されていた観念から必然的に流れ出したからであり、後者もまたイデオロギー的条件によって生み出されたものであることもありうる、などといった具合である。しかし、この連鎖を伸ばしていくと、研究は必然的に生産的な特徴を持つ原因にたどり着く。言いかえれば、イデオロギーは究極的には生産条件によって規定されている。²¹

このように、ボグダーノフの理解では、イデオロギーが生活条件によって規定されるというのは、直接的にはなく、あくまで究極において、すなわち最終審級においてである。

イデオロギーは下部構造の直接的反映でないため、生産様式の変化とイデオロギーの交代はけっして同時にはなされない。総じて、イデオロギーは生産様式の変化に遅れる傾向がある。ボグダーノフは、イデオロギーは技術や経済に比べて保守的性格が強いことをくりかえし強調している。そのため、社会においては前時代のイデオロギーがある程度残存することになる。とりわけボグダーノフは、権威主義的封建社会から個人主義的資本主義社会への移行がきわめて長期の複雑な過程を経過したものであることを示そうとしている。著書『社会意識学』では、「過渡的形態」に二つの章をあてており、封建社会や資本主義そのものよりもはるかに多くの紙幅が割かれている。さらに、ボグダーノフは、資本主義社会においても、権威主義の残滓が根強く残されていることを強調している。資本主義時代そのものが長く複雑な過渡的過程としてとらえられている、と言ってもよい。²²したがって、ボグダーノフは、歴史において、個人主義イデオロギーが、純粋な形式で現れたことは一度もない、と断定している。個人主義イデオロギーは常に、他のイデオロギーとりわけ前時代の権威主義イデオロギーの残存物と結びついて現れた、と言う。²³

このように、イデオロギーを生産から自立した上部構造、あるいは下部構造の単純な反映とみなすのではなく、「イデオロギー」、「技術」、「経済」の密接な相互関係の総体を普遍的な社会プロセスの全体とみなすことにより、ボグダーノフはイデオロギーを多元的かつ重層的な構造としてとらえ、その複雑な変動の動態を描こうとしている。

結論

ボグダーノフは、イデオロギーの社会的機能を、上部構造の下部構造への反作用とみなすにはとどまらず、マルクス主義イデオロギー理論の「下部構造－上部構造」図式そのものを否定する。ボグダーノフは、イデオロギーを生産から遊離した上部構造とする解釈も、またイデオロギーを下部構造の単純な反映とみなす見解もともにしりぞけ、「技術」、「経済」、「イデオロギー」を、「組織化」という普遍的な社会的プロセスの「局面」、「側面」として、たがいに不可分に結びついたものとしてとらえなおそうとしている。この構想がイデオロギーを多元的かつ重層的な構造として把握し、その動態を複雑なプロセスとしてとらえることを可能にしている。

注

本稿は2021年度科学研究費補助金（課題番号20K00474）による研究成果の一部である。

- 1 *Богданов, А.* Наука об общественном сознании: Краткий курс идеологической науки в вопросах и ответах. М.: Книгоиздательство писателей в Москве, 1914. С.9-10. (ボグダーノフ『社会意識学概論 イデオロギーの科学』林房雄訳、改造社、1930年、18頁) 強調は原文、以下すべて同様である。なお、ロシア語文献からの引用はすべて引用者が翻訳したが、日本語訳が存在するものについては、その該当頁も示すことにする。
- 2 見田宗介『現代社会の社会意識』弘文堂、1979年、117-118頁。
- 3 この点については、以下を参照、佐藤正則『ボリシェヴィズムと〈新しい人間〉 20世紀ロシアの宇宙進化論』水声社、2000年、91-101頁。
- 4 『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻、大月書店、1964年、7頁。櫛田民蔵「社会主義は闇に面するか光に面するか」『改造』大正13年7月号、改造社、1924年、3頁。河上肇「『マルクスの謂ゆる社会的意識形態について』『経済論叢』第22巻第1号、京都帝国大学経済学会、1926年、140頁。新字体・現代かなづかいに改めた。
- 5 山之内靖『社会科学の方法と人間学』岩波書店、1973年、94-95頁、渡辺憲正『イデオロギー論の再構築 マルクスの読解から』青木書店、2001年、26-27頁。
- 6 *Богданов.* Из психологии общества. Изд. 2-ое, дополненное. СПб.: Электронпечатня товарищества “Дело”, 1906. С.57.
- 7 *Богданов.* Из психологии общества. С.57.
- 8 *Ленин, В.* Полное собрание сочинений. Изд. 5-ое. М.: Издательство политической литературы. 1968. С.342-343. (『レーニン全集』第14巻、大月書店、1956年、390-391頁)
- 9 山之内『社会科学の方法と人間学』、5頁。
- 10 *Богданов.* Из психологии общества, С.40-41.
- 11 *Богданов.* Из психологии общества, С.64; *Богданов.* Культурные задачи нашего времени. М.: Издание С. Дороватовского и А. Чарушникова, 1911. С.44.
- 12 *Богданов.* Наука об общественном сознании. С.6. (林訳、12頁)
- 13 *Богданов.* Наука об общественном сознании. С.10. (林訳、19頁); *Богданов.* Культурные задачи нашего времени. С.3.
- 14 *Богданов.* Наука об общественном сознании. С.26-28. (林訳48-50頁)
- 15 Там же. С.27, 28. (林訳48, 50頁)
- 16 *Богданов.* О художественном наследстве. // О пролетарской культуре: 1904-1924. М.-Л.: Издательское товарищество “Книга”, 1925. С.146-147. (安宇植他編『資料 世界プロレタリア文学運動 第1巻』三一書房、1972年、68頁、小泉猛訳)
- 17 *Богданов.* Из психологии общества, С.60; *Богданов.* Краткий курс экономической науки. Изд. 3-е. М.-П.: Государственное издательство, 1923. С.12. (ボグダーノフ『経済科学概論』林房雄・木村恭一訳、改造社、1930年、35頁)。
- 18 ルイ・アルチュセール『再生産について イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』西川長夫、伊吹浩一、大中一彌、今野晃、山家歩訳、平凡社、2005年、95, 282-283頁。ルイ・アルチュセール『マルクスのために』河野健二、田村俣、西川長夫訳、平凡社、1994年、411-412頁。今村仁司『アルチュセールの思想 歴史と認識』講談社、1993年、35頁。いずれも強調傍

点を削除した。

- 19 *Мазаев, А.* Концепция «производственного искусства» 20-х годов. М.: Наука, 1975.
- 20 *Богданов.* Наука об общественном сознании. С.11. (林訳20頁)
- 21 Там же. С.26. (林訳47頁)
- 22 Там же. С.175-176. (林訳 328–330頁)
- 23 Там же. С.98. (林訳173頁)

Преодоление схемы «базис и надстройка» в теории идеологии у А. А. Богданова.

Масанори САТО

А. А. Богданов развил оригинальную теорию об идеологии. Он отождествляет три понятия: «идеология», «общественное сознание» и «духовная культура», и подразумевает под термином «идеология» почти всю духовную деятельность человека. В этом отношении он расходится со многими исследователями Маркса, которые исключают сознание причастное к производственным процессам из понятия «идеология». Но в то же время Богданов признает, что производственные процессы проведены при участии сознания людей. Он отнюдь не сводил идеологию к надстройке, которая стоит над экономическим базисом. В самом деле он почти не употребляет термины «базис» и «надстройка».

Отвергая бинарную схему «базис и надстройка», Богданов разделил социальные процессы на три момента или стороны: «техника», «экономика» и «идеология». Он утверждает, что все эти три момента или стороны служат для приспособления человечества к внешней природе в его борьбе за существование. По Богданову «техника», «экономика» и «идеология» представляют собой моменты или стороны всеобщих социальных процессов («организация») и неразделимо связаны друг с другом. В своей теории об идеологии он приближается к французскому философу Луи Альтюссеру.

Богданов отнюдь не рассматривает идеологию ни как «надстройку», оторванную от базиса, ни как прямое отражение базиса. Исходя из представления об идеологии как моменте или стороне социального процесса, он выясняет плюралистическую и многослойную структуру идеологии и её динамику.